

国際室 だより

No. 46

国際協力室長の交代

4月1日付の人事異動で平山次郎室長は燃料資源部長に移り、かわって燃料資源部燃料鉱床課長の藤井敬三氏が新室長となりました。平山前室長は、昭和63年4月に海外地質調査協力室（現国際協力室）長となられ、JICA新期プロジェクトの開発等に辣腕をふるわれましたが、その手腕を是非燃料資源部長としてふるってほしいということで、わずかに任期1年でしたが国際室を去られました。平山前室長はその豪快な指導力で国際室を引っ張ってこられました。今回古巣の燃料資源部に長として戻られます。ますます真価を発揮されることでしょう。

藤井新室長は、サウジアラビア、インドネシア、フィリピン、カナダ、アメリカ、オーストラリア、韓国、中国、パキスタンと海外経験も豊富で、ITIT国際研究協力にも長年携わってこられました。その豊富な経験は最近ますます活性化している地質調査所の国際活動の運営に活かされていくことでしょう。

トルコ雑録

1989年3月～5月の3ヶ月間、国際協力事業団の短期派遣専門家としてトルコ共和国に滞在し、活断層の地質学的研究に関する技術協力を携わってきました。この技術協力は、1982年から1987年までITITプロジェクトとして、地質調査所とトルコ鉱物資源調査開発庁（MTA）が共同で実施した「活断層、地震断層および地震予知に関する研究」と「第四紀地殻変動および地震予知に関する研究」を発展させたものです。

鉱物資源探査を主とした両機関の20年以上にわたる交流、ITITプロジェクトで6年間に築き上げた協力体制に加えて、3ヶ月という十分な滞在期間、国際協力事業団から提供された機材・現地業務費等々の好条件に恵まれて、順調に業務を消化して帰国することができました。長期に滞在された諸先輩をさしおいて雑文をものするのは、気がひけるものですが、トルコでの研究と生活に関するいくつかの印象を記してみます。

(1) トルコの地震研究

国際協力事業団ベースの対トルコ協力としては、今回

の派遣がはじめて地震予知をテーマとしたこともあって、トルコでの地震研究の現状についての情報収集も多少行ってみました。

トルコは日本と同様な地震多発国で、特に北アナトリア断層では、今世紀中ごろにM=6～7クラスの地震が繰り返し発生しています。そのうえ、最近のトルコ経済・社会の発展にともなって、大都市への人口・資本の集中と、都市の無秩序な膨張は、地震災害の影響を増幅する傾向にあります。

こうした自然・社会的な条件に対して、地震予知・災害緩和施策およびそのための基礎研究は、非常に立ち遅れているという印象を受けました。

地震の観測体制は、一部の研究所でごく小数のテレメーター観測が行われている以外、概ねオフラインで地震計・記録システムとも旧式のものが使われています。また、データの解析や分析のためのコンピューターの導入も遅れているようです。

全体に人材が乏しく、機械もないという状況ですが、その背景には、膨大な軍事費に圧迫されている文教・基礎研究予算、激しいインフレによって下落を続ける貨幣価値といった困難な研究環境が浮き彫りになってきます。

そのうえ、国内にいくつかある研究機関間の風通しが非常に悪いことも、限られた予算を有効に使う上での大きな障害となっているようです。データや研究の交流はほとんど行われず、限られた成果が公表されているはずの雑誌もサーキュレーションは非常に悪いようです。地震観測に限らず、地震研究に関連したさまざまな分野の少なからぬデータが、研究者のロッカーの中で朽ち果てていくようです。

こうした風通しの悪さは、省庁レベルから個人レベルにまでおよび、強固な縦割りシステム・官僚支配と無関係ではないように思えます。現在までに、合衆国、ドイツ、イギリス、日本などがトルコの大学・研究所と協力して北アナトリア断層の研究を行っていますが、トルコの地震予知・災害緩和体制を作り上げるにはまだまだ時間とお金が必要です。トルコ国内でも、国際連合の計画している国際防災年毎に対応すべく、官庁・大学・研究所など関連機関を糾合した委員会が動きだしていま

すがこれを機に効率的な地震予知・災害緩和のための国家的組織ができることを大いに期待したいものです。

今回の技術協力のテーマである活断層の地質学的研究に関して 日本で行われているようなスタイルの研究にかぎって言えば トルコにはほとんど研究者も指導者もないのが現状です。これは 第四紀についての研究全般に関してもほぼ同じ状況といえます。

MTAには数多くの地形学者がいて トルコ地形学会の中核となっていますが 彼らの多くは地道にデータをあつめて実証的な研究を行うよりは 大まかなデータに基づく中新世以降の構造発達や地形発達といった 大きな 地質学者の向こうを張るような議論を好みます。したがって 日本で行われている 地形や露頭を虫めがねで観察するような研究は全くといっていいほど行われていません。その背景には 地形学・第四紀学の教育の場がないこと 大学では地形図や空中写真(ともに軍事機密)の使用が自由にならないこと さらにフィールドの経済的負担がきわめて大きいといった問題があり 地質学教室にも共通した問題となっているようです。

(2) パーソナルコンピューターブームと現実

トルコではこのところOA化がブームになっています。アンカラでも次々にコンピューターショップがオープンし 大学やオフィスにパソコンが導入されています。少し前までは 64KB か 128 KB の MSX が主流だったようですが ここにきて IBM-PC 仕様の 16ビットマシンがどんどん市場を拡大しています。

とはいえ 30歳前後の MTA の研究者の月収が200 USドル強のところ 16ビットパソコンの値段が2000 USドル以上で 個人にはまだまだ手がとどきません。ちなみに パソコンなど外国製品の価格はトルコ国内でもすべてUSドル マルク等で表示してあって 日毎のトルコリラの下落とともに値段も上がって行くわけです。

筆者のカウンターパートのMTA地質部には 今回の派遣にともなってパーソナルコンピューターが寄贈されましたが 地質部にはこれが最初のパーソナルコンピューターとなりました(写真1)。このパーソナルコンピューター(IBM-PC 互換)は大歓迎され目下活躍中です。今までは物理探査部のメインフレーム(主記憶2MB)があるからパーソナルコンピューターは不要という方針だったようですが 寄贈されたパーソナルコンピューターの主記憶が4MBというのには彼らも驚かされたようでした。

4月末に アンカラでコンピューターショーが開催されました。日本のショーとは違って あっと驚く新製品が出るといった新鮮味はありませんが 新たにトルコ市場に参入したメーカーを含む多くのメーカーが16ビッ

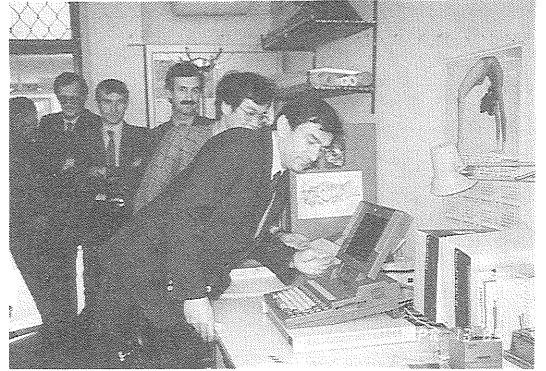


写真1 贈呈式、電源を入れる I. Çakmak 地質部長。

ト機を中心に出席して 会場はなかなかの熱気でした。そのショーの最中に会場が停電したのは お笑いでしたがトルコの電力事情を象徴しているともいえます。停電の間 各ブースはみんな閉店休業ですが その中で日本製のバッテリードライブのラップトップ(E社製 もちろん IBM-PC) が一手に客を集めていました。

トルコはしょっちゅう停電があるうえ電圧が不安定で過保護でスポイルされた日本製の電子機器は損傷をうけることがままあるのですが IBM とその互換機は 特に電源安定対策を施さなくてもめったに故障しないとのことでした。トルコのコンピューターは ほとんどが IBM-PC 仕様でトルコ語キーボード フォント等も完備しており 日本の「標準機」は現状では全く無力です。

(3) インフレーション

トルコのここ1年間のインフレ率は80%以上になります。同時にトルコリラの対ドルレートも一年間に半分かたく下がっています。給料の方も年間に数十%は上がっているようですが ベースアップが後手後手になるうえ 引き上げ率はインフレ率を下回るため 実質賃金は下がり続けておりみんなやりくりで苦労しています。

今回の滞在中にも 昨日まで 800 リラ(約50円)だった缶ビールが突然1000リラになってびっくりというようなことがしばしばありました。円で旅費をもらっている身には あまり痛手とはなりません。トルコの人たちにとっては ビールの味もきつと苦いことでしょう。

筆者にとって苦かったのはインスタントコーヒーの味です。ぜいたく品のため関税率が高いせいで なんと 100gが1000円近くします。喫茶店でも一番高いソフトドリンクはインスタントコーヒーで トルコの人たちにとっては ほんとうにぜいたくな飲み物なのです。

(奥村晃史)